

史跡大安寺旧境内の発掘調査（第 139 次）

I. はじめに

奈良市では史跡大安寺旧境内の範囲確認を主目的として、本年度から調査を開始しました。大安寺の寺域については現在大きく 2 つの案が出ており、いずれか判断する手掛かりの一つとして、六条大路の有無確認が必要です。六条大路は大安寺を東西に横断するように復原されることもあります。現在まで大安寺の寺域内では確認されていません。このため本年度は 8 月 3 日から南大門と塔院間に想定される六条大路の確認を主目的とし調査を行っています。また、塔院北西部（左京七条四坊一坪に該当）の様相確認も目的のひとつとして調査を実施しました。調査は六条大路南側溝の確認のため、その想定位置に東西 5 m、南北 40m の約 200 m² の発掘区を設定して実施しました。

II. 調査成果の概要

検出した主な遺構には、溝 2 条、建物 1 棟、井戸 1 基があります。他に地盤を均すための整地を 2 箇所、また近世の水田耕作に関わるとみられる、いわゆる素掘小溝を約 80 条確認しました。

(1) 六条大路南側溝を踏襲するとみられる溝を発見

溝 2 条は発掘区北辺で確認しました。いずれも幅 1.5～2.0m の東西方向の溝で、約 3.0m の間隔をあけて併行して掘られています。北側の溝 1 は深さ約 0.4m で、埋土から瓦類が多く出土し、14 世紀中頃の軒平瓦が出土しました。南側の溝 2 は深さ約 0.2m で、こちらも埋土から瓦類が多く出土しましたが、出土遺物の年代は奈良～平安時代におさまります。

発掘区北端部では整地 6 を確認しました。整地 6 は南北約 1.0m 分、東西約 2.0m 分を検出しました。整地土の厚さは約 0.2m で、炭や鋳滓を多く含み、付近で鑄造作業が行われたことがうかがえます。また 12 世紀前半の瓦器碗が出土しました。

発掘区北辺で検出した併行する 2 本の溝は、その位置関係から北側の溝 1 が六条大路南側溝、南側の溝 2 が築地塀雨落溝で、両溝から多量の瓦類が出土したことから、両溝間の約 3.0m の空閑地に塔院北面を画する築地塀を想定することができます。また溝 1 の北側は六条大路路面であったとみると整地 6 は平安時代後期の道路の補修跡とみることができます。しかし溝 2 からは古代の遺物しか出土していないことに対し、溝 1 からは室町時代にまで下る遺物が出土しています。この為、溝 1 は室町時代の可能性も残ります。しかし、検出位置は南大門前に位置することから、六条大路南側溝が何度も浚渫され、室町時代まで維持・管理されたもので、六条大路南側溝を踏襲する溝と現段階では考えます。溝 1 が六条大路南側溝を踏襲した溝かどうかは、次年度以降の範囲確認調査でも引き続き検討していく必要があります。

(2) 塔院北西部の利用過程の一端が明らかに

建物 3 は梁行 2 間 (3.6m)、桁行 1 間 (2.7m) 以上の東西棟掘立柱建物です。

井戸 4 は南北約 2.5m で、東西約 2.0m 分を確認しました。深さは約 1.3m です。埋土から 8 世紀前半の土師器・須恵器、斎串が出土しました。須恵器の中には鉄鉢とよばれる金属製仏具を模したのも出土しています。遺構の重複関係から、建物 3 より古いことがわかります。

発掘区南半部を覆う整地 5 は南北約 21m 分、東西 5.0m 分を検出しました。整地土の厚さは 0.1～0.4m で、8 世紀末～9 世紀初頭にかけての黒色土器や、9 世紀前半の不退寺創建軒平瓦の同范品が出土しました。

塔院地区北端部で検出した井戸 4 の出土遺物から、少なくとも一坪北端部は奈良時代前半から大安寺が利用していたとみられます。ただし、井戸 4 の南側約 5.0m 離れた整地 5 の存在と、その出土遺物から、井戸 4 以南では平安時代まで、整地作業すら行われていなかったことがうかがえます。おそらく整地 5 は、平安時代にまで下る、西塔の創建頃の周辺整備を目的になされたものと考えます。このように塔院地区の利用過程の一端が明らかになりました。また近世の素掘小溝から 18 世紀の陶器が出土したことは、大安寺の寺域が水田に変わる時期を考える上で貴重な資料となります。

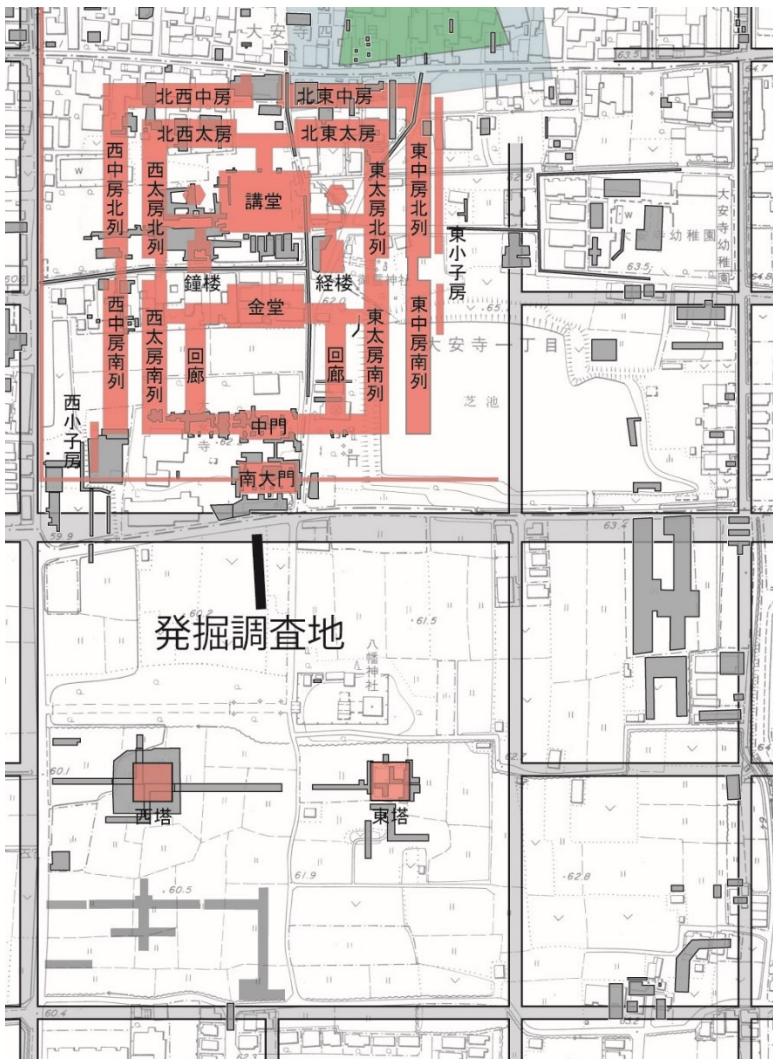


图1 発掘調査地位置図

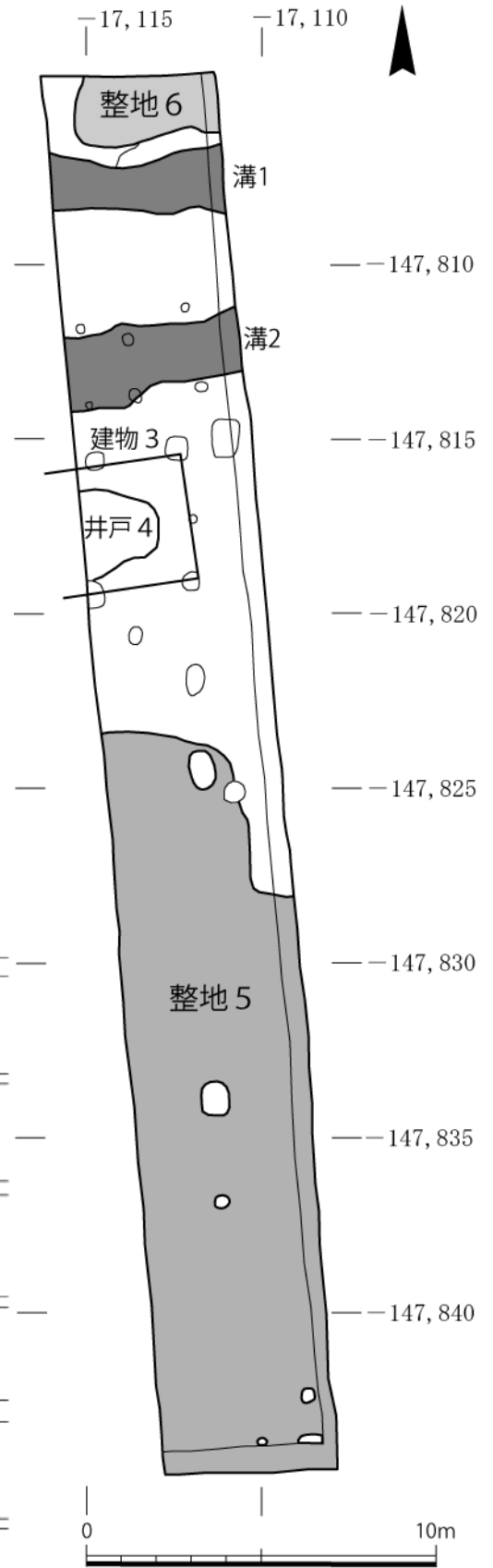


图3 遺構平面図 (1/200)

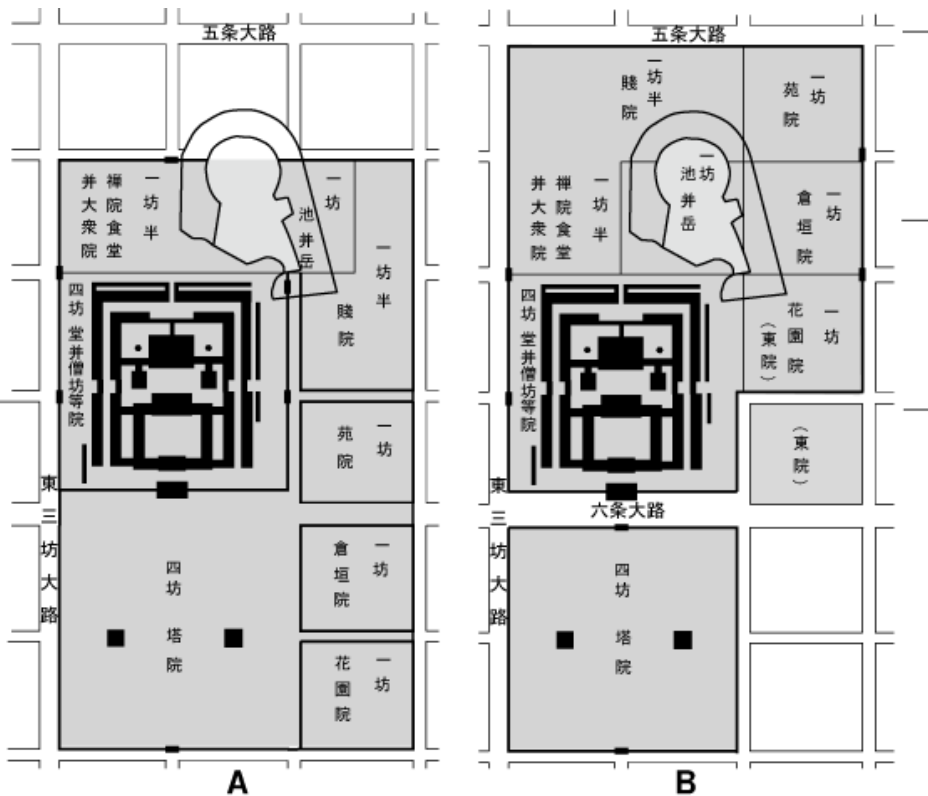


图2 大安寺の寺域復元2案